

主 題：復活の力

聖書箇所：ペテロの手紙第一 1章21節

私たちクリスチャンにとっては毎日がイースターであるといえます。主の復活を記念して礼拝を捧げるからです。このとき、もう一度自分自身に問いかけてみましょう。私は本当に救われているか？ 私は聖書が真実だと信じているか？ 確実に天に希望があると信じているか？ このすべてに YES であるはずですが。しかし、クリスチャンであるといいながら、この問いに不確かさをもっている人たちは多いのです。何を根拠として信じているのか、私たちがしっかりと確信を持つために、今日の聖書箇所からごいっしょに学んでゆきましょう。

「あなたがたは、死者の中からこのキリストをよみがえらせて彼に栄光を与えられた神を、キリストによって信じる人々です。このようにして、あなたがたの信仰と希望は神にかかっているのです。」

ペテロは“私はまちがいで救われている”と断言します。その確信は何によっているのでしょうか？そして、“私の信仰は本物かどうか”吟味してください。

★ 救われている確信は何に拠っているのか？

○神を信じたから。

聖書をみたとき、私たち日本人にとっては代々教えられてきた神と聖書の神との相違を知ります。唯一まことの神という神観です。しかし、それだけなら、そう信じている人は多いかもしれません。ヤコブ 2：19 には「あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。」とあります。また、ローマ 1：21 には神を知っていながらその神を認めようとしなさいといわれています。これだけでは救われないのです。これでは単なる知識です。何を信じているかが問題なのです。クリスチャンが信じる神は、

1) イエス・キリストを死者の中からよみがえらせた神です。

神はいのちの源です。いのちがあるのです。復活は死に対する勝利宣言です。

2) イエスに栄光を与えられた神です。

a) 栄光に満ち溢れた神です。そして、私たちをもその栄光の中へと招き入れてくださるのです。神の臨在のもとへです。「キリストによって」とは、信仰とはどういうものかを教えるその真髄となることばです。キリストを信じる信仰こそまことであるというのです。イエス・キリストを信じることなくして神を信じることはあり得ないのです。イエス・キリストが仲介者なのです。マタイ 11：27「すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。…子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者がありません。」、ヨハネ 1：18「…父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」、ヨハネ 17：6「わたしは、あなたが世から取り出してわたしに下さった人々に、あなたの御名を明らかにしました。彼らはあなたのものであって、あなたは彼らをわたしに下さいました。」、この「御名」とは神ご自身のことです。

b) 神との和解を達成する器として神はイエス・キリストを用いられました。2コリント 5：19「すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、…」、1ペテロ 3：18「キリストも一度罪のために死なれました。…私たちが神のみもとに導くためでした。」、ローマ 5：1「信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」

1ペテロ 1：20 には「キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現われてくださいました。」とあります。この「知られていた」というのは、前もって知る、予知、前もってある職務に任命する、という意味があります。キリストは世の初めから神の大いなる計画によって、ある職務に任命されたのです。それによってこの世に誕生されました。

これが、神が備えられた救いへの唯一の道です。神は世の始まる前からこれを計画されていたのです。

☆信仰によって救われた私たちの責任は何でしょう？

1ペテロ 1：14-21 には、救われた者の責任を教えています。バークレーという神学者はこのように言っています。「神によって選ばれることは大いなる特権に与ることだけでなく、大いなる責任を引き受けることでもある。」と。その責任とは、

1) 1 ペテロ 1 : 14-16 神への従順と聖潔

神に従っていこうとする新しい性質を神から与えられました。「聖さ」とは、他のものとは異なっている、神の方に心が向けられてゆくために、周りの人たちにその区別が明確になる、ということです。イスラエルの民が神に選ばれた理由はここにあるのです。神は救った者を変えていってくださるのです。

2) 1 ペテロ 1 : 17-21 神への恐れ

神は公平にさばかれる方です。神の審判があるのです。私たちの心の動機をごらんになる神です。今日というこの一日をどのように生きるかを私たちは考えるのです。「恐れ」という言葉は誤解されますが、恐怖とか、悪い結果を心配して恐れるとかではなく、神への敬いの心なのです。自分の心をしっかり守って歩んでゆくように、といわれるのです。「畏敬とは自分が神の前にあることを知っている人の心の態度である。すべてのことば、行為、生きる人の心の態度である。」と前述のバークレーは言います。

救われていることが確実であるなら、その責任を覚えて歩んでゆきましょう。どのように生きるかです。そのことば、態度が問われます。主を恐れ敬って…。私たちの主はよみがえり、今も生きておられる主だからです。